

中国の国家科学技術戦略

—— いかにして成し遂げられてきたか

失敗を恐れない国民性も飛躍の原動力となっている。

(2021年12月1日開催、「日外協ウェビナー」から抜粋)



麗澤大学

名誉教授

三瀨正道

「中国の技術力はなぜこれほど進歩したのか」。多くの日本人から理由を聞かれる。この20～30年間、日本は中国に追い上げられ続け、中には追い越される分野まで出てきている。日本は中国の国家科学技術戦略を完全に見誤ったと言える。

政府が強力にサポート

中国の国家科学技術戦略の始まりは、建国の年である1949年に設置された中国科学院。ここを起点にその後、科学技術の発展に大きな役割を果たしたのが、「863計画」(国家高技術研究開発計画)と「973計画」(国家重点基礎研究開発計画)だった。

「863計画」は1986年3月にスタート。重点9分野——①バイオ技術、②宇宙飛行、③情報技術、④レーザー技術、⑤オートメーション技術、⑥エネルギー技術、⑦新素材、⑧海洋技術、⑨超伝導技術が定められた。

「973計画」は、863計画から10年後の1997年3月から。産業転換を目指し、エネルギー・情報・資源・人口と健康・素材などを総合的に研究するとともに、先端的な基礎研究も手がける。同時に、素質の高い人材を養成する。各プロジェクトは研究期限5年で年度ごとに組織し実施する他、産学協同・産軍協同などにも力を

入れる。

2015年5月、第13次5カ年計画(2016–2020)では、2025年に中国を製造大国から製造強国にする「中国製造2025」が打ち出された。

2016年2月の「国家重点研究開発計画」では、863計画と973計画を統合。重複・分散・閉鎖的・低効率といった従来の問題を解消するため、100以上あった科学技術計画は、①国家自然科学基金、②国家科学技術重大特別プロジェクト、③国家重点研究開発計画、④技術革新導入特別プロジェクト(基金)、⑤基地・人材特別プロジェクトの5つに統合された。

2017年1月、人民日報に「中国はグローバルな影響力をもつ科学技術大国になった。胸を張ろう」が掲載。中国の科学技術論文の国際的引用数がドイツ・イギリスを抜き米国に次ぐ世界第2位に、発明特許の申請数・認可数で世界一になり、ハイテク企業が13万6000社を超えたことなどが紹介されている。

2017年秋の十九全大会(中国共産党第19回全国代表大会)のスローガンは「インターネット、ビッグデータ、人工知能と実体経済との結びつき強化を」。

第14次5カ年計画(2021–2025)では、「イノベーション型国家の先頭集団入り」「基礎研究と開発能力の弱さを克服するため内循環強